

着点動作主動詞の位置付け： 典型的な他動詞と再帰動詞と比較して

—日本語と中国語を中心に—

夏 海 燕

This research focuses on the basic meanings of “Goal-Agent Verbs (GAVs)” in Japanese and Chinese. Different from prototypical transitive verbs like “*kill*”, which denote an action that is schematically understood to be transmitted from the subject to the object, the subject of GAVs is the starting point and the endpoint of the action, therefore the subject of GAVs bears dual roles: that of the agent, while also being the goal of the action. There are two essential semantic features in the basic meanings of GAVs. One is that the action indicated by these verbs can be considered as caused-motion whose goal coincides with the agent. The other is that the subject of these verbs is an affected agent, who is deviant from the prototypical transitive agent as a volitional controller of a directed action. Based on transitivity, we made comparative study of GAVs and typical reflexive verbs, and indicate GAVs lie somewhere on the continuum between typical transitive verbs and typical reflexive verbs.

キーワード：着点動作主動詞，使役移動，求心性，受影性，他動性，再帰性

本研究では、日本語と中国語の着点動作主動詞を取り上げ、その基本義を詳細に検討したうえで、「使役移動のプロセス」「動作主への求心性」「動作主の受影性」といった着点動作主動詞の基本義に共通して見られる意味的性質を明らかにする。また、本研究における着点動作主動詞と先行研究で言われてきた「再帰動詞」などの概念との相違を明らかにし、他動性及び再帰性から着点動作主動詞の位置付けを考える。

1. 着点動作主動詞

着点動作主動詞とは、＜動作主が対象に働きかけることによって、動作主の身体または領域が着点となる事物の移動が起こり、動作主が動作の影響を受ける＞という基本義を持つ動詞のことである（夏 2010, 近刊）。日本語と中国語にはそれぞれ以下のようなものがある。

(1) 日本語における着点動作主動詞

- I. 摂食動詞：食う, 食らう, 食べる, 飲む, なめる, 吸う, 食する, 喫する
- II. 着衣動詞：着る, はく, かぶる, こうむる, まとう, はおる
- III. 負荷動詞：負う, 背負う, しょう, 担う, 担ぐ, 抱える, いただく, だく
- IV. 知覚動詞：見る, 聴く, 嗅ぐ
- V. その他：招く, 来す, 呼ぶ, もらう, 受ける, 預かる, 買う, 借りる, 浴びる, 教わる¹

(2) 中国語における着点動作主動詞

- I. 摂食動詞：吃 chi, 喝 he, 饮 yin, 吞 tun, 吸 xi
- II. 着衣動詞：穿 chuan, 着 zhuo, 戴 dai, 披 pi, 被 bei
- III. 負荷動詞：担 dan, 扛 kang, 背 bei, 挑 tiao, 抱 bao, 负 fu
- IV. 知覚動詞：看 kan, 见 jian, 听 ting, 嗅 xiu, 闻 wen
- V. その他：招 zhao, 买 mai, 借 jie, 学 xue

このように、着点動作主動詞には、着衣、摂食、負荷、知覚など、いくつかの下位動詞グループが含まれる。本節ではまず、下位動詞類ごとに着点動作主動詞の基本義を詳しく見ていく。

1.1 摂食動詞

日本語の「食べる」「食う」「飲む」や中国語の“吃”“喝”“饮”などは、飲食関係の動詞で、いわゆる「摂食動詞 (INGESTIVE VERBS)」と呼ばれる部類に属するものである。摂食動詞は、動作主が飲食物を口に（更に体内へ）移動させるという使役移動のプロセスがあるため、着点動作主動詞のカテゴリーに入る。

摂食動詞の定義は、先行研究においても明確に定められているわけではないが、概ね狭義的な見方 (Newman 1997, 2009, Williams 1991 など) と広義的な見方 (Masica 1976 など) の2通りの考え方がある。狭義の「摂食動詞」は摂食行為に関係のある動詞だけを指す。一方、EAT・DRINK動詞に限らず、INGESTIVE VERBSの範囲をより広く捉える研究も見られる。Masica (1976) は、インドの諸言語の研究において、INGESTIVE VERBSについて、eat, drinkの他に、hear, see, understand, read, learnなどを挙げ、これらの動詞は物理的、或いは心理的に何かを吸収する (having in common a semantic feature of taking something into the body or mind (literally or figuratively)) (Masica 1976 :46) という共通性を持っていると述べている。本研究では、摂食動詞について狭義の見方を取り、EAT・DRINK動詞のことを指す用語として使用する。

1.2 着衣動詞

着衣動詞について、影山 (1980) では「主要的着衣動詞」と「二次的着衣動詞」という区別がなされている²。日本語において、「主要的着衣動詞」は「着る」「かぶる」「はく」をその典型とし、その意味は次の3つの基準で特徴付けられるとされる。

- (1) a. 対象物が衣類である。
- b. 特定の身体部分が関与する。
- c. (話者によっては) 特定の動作様態が要求される。

(影山 1980: 78)

二次的着衣動詞として、日本語には、「(腕時計／ブローチ／イヤリング／ペンダント／ブラジャー／マスクを) つける」「(眼鏡／たすき／エプロンを) かける」「(指輪／ブレスレットを) はめる」「(マフラー／スカーフを) 巻く」などが挙げられる。それに対して、中国語においては、“戴 (手表 (腕時計) / 胸针 (ブローチ) / 口罩 (マスク) / 眼镜 (眼鏡) / 项链 (ネックレス))”のように、“戴”という一次的着衣動詞を使用することが多く、二次的着衣動詞としては、“系 (围裙 (エプロン) / 皮带 (ベルト) / 丝巾 (スカーフ))”の“系”が挙げられる。日本語の「つける／かける／結ぶ／しめる」や中国語の“系”のような動詞は、以下の3点で、<着衣>の意味

が二次的である。

- (3) a. 目的語が CLOTHES に限られない (「ロープを結ぶ」) ;
- b. 取り付けが身体に限定されない (「壁に額をかける」) ;
- c. 身体部分が動作主に限定されない (「お父さんのネクタイをしめてあげる」)

(影山 1980: 92)

本研究でいう「着衣動詞」は日本語の「着る」「かぶる」「こうむる」「はく」「まとう」及び中国語の“被”“着”“穿”“戴”“披”を指す。

日本語と中国語において、主要な着衣動詞は適用する身体部位という観点からそれぞれ使い分けが見られる。日本語の「かぶる」が頭部, 「着る」は肩からの上半身 (上下一セットまたは上下一体の衣類だと下半身も含む), 腰からの下半身は「はく」というように使い分けられているが, 中国語では、頭部の“戴”と頭部以外の“穿”という区別しかない。図1は両言語における主要な着衣動詞の使い分けを表している。

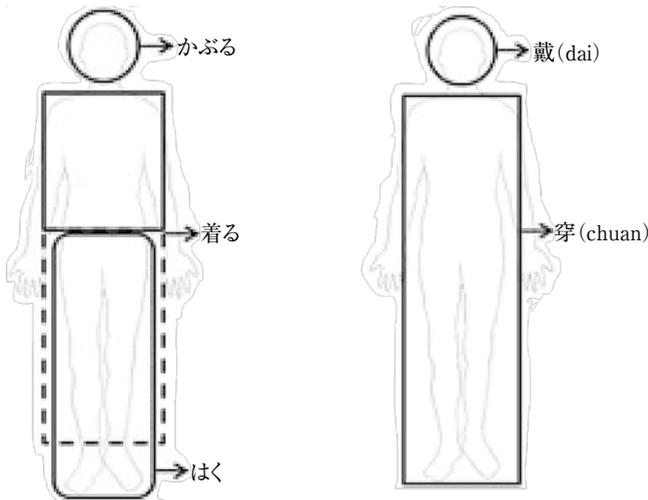


図 1. 日本語と中国語の主要な着衣動詞における身体部位の指定

1.3 負荷動詞

負荷動詞には、日本語の「負う」「背負う」「しょう」「担う」「担ぐ」「抱える」「いだく」「だく」、中国語の“担”“扛”“背”“負”“挑”“抱”があるが、その違いは主に重みがかかる身体部位にある。

「負う」と“背”は、＜背中に〔人や物の重みを〕受ける＞というのが基本義であり、人や荷物の接触する身体部位は背中である。「背に負う」からきた「背負う」、また「背負う」からきた「しょう」も同様に、＜背中に〔人や物の重み〕を受ける＞というのが基本義である。

「抱える」は背中ではなく、付着する身体部位は胸や脇であり、＜〔物を〕腕で囲むようにして胸で支えたり、脇の下に挟んだりして保持する＞という動作を表す。

「担う」と「担ぐ」には＜〔物を〕肩で支える＞という共通した基本義がある。つまり、肩が負荷のかかる位置である。物を直接肩にかけるだけでなく、天秤棒などの道具を用いる場合もある。中国語の“扛”“担”“挑”も肩が着点となるが、そのうち“担”と“挑”は天秤棒などの使用が必須である。

負荷動詞には、さらに日本語の「だく」「いだく」と中国語の“抱”がある。「だく」は「イダク」「ウダク」の頭母音の脱落によって出来たものである。「いだく」「だく」と“抱”には＜両腕を前に回して〔人や物を〕胸のところに寄せる＞という共通した基本義が認められる。

1.4 感覚動詞

知覚動詞の一部は、主体の働きかけと知覚の受容があるため、着点動作主動詞のカテゴリーに入る。なお、研究分野によって「知覚」と「感覚」に対する定義が多少異なるが、本研究ではその違いには立ち入らない。

視覚、聴覚、触覚が光や音などといった物理量を受容し、各受容器は受容した物理刺激を電気信号へと変換し、中枢神経系へ伝達する。それに対して、嗅覚と味覚はある特定の化学物質に反応し、化学感覚とされる。

受容する刺激の性質が異なるものの、物理感覚も化学感覚も外部の波長刺激や化学物質の刺激を取り入れようとする経験者から対象へのメンタルコンタクト (mental contact), そして対象から経験者への刺激 (stimulus) という両面性を備えている (cf. Gruber 1969, Lakoff 1993b, Kemmer 1993, 谷口 2005)。したがって、知覚動詞は着点動作主動詞の定義を満たしてい

る。ただ、触覚の「触る」(中国語の“摸”)系は基本的に手の移動であり、対象物の使役移動がないため、味覚の「味わう」(中国語の“尝”)と合わせて除外することにした。

知覚動詞の両面性に関して、Fillmore (1968) の格文法では、知覚主体は経験者格 (Experiencer) を取り、経験者格を Agent, Patient, Source, Goal から区別している。Lakoff (1993) は、知覚の両面性を提示し、知覚表現における経験者格には、主体的 (Agent) 側面と被動作主的 (Patient) 側面が内在していると指摘している。つまり、動作主的な役割を担う一方で、対象物から情報を受け取る側面として着点、あるいは被動作主的な役割も担っているとしている。

- (4) a. From my office, I can see the bay.
b. The view from my office blew me away.

(Lakoff 1993: 233)

(4a) において、I は動作主で、from 句は知覚行為の起点を表している。一方、(4b) では me が被動作主になり、from 句も知覚行為の着点になっている。

2. 着点動作主動詞の基本義に見られる意味的性質

着衣や摂食などの着点動作主動詞は基本義において、「使役移動のプロセス」「動作主への求心性」「動作主の受影性」といった意味的性質を共通して有していると考えられる。本節では、これらの意味的性質を詳しく見ていく。

2.1 使役移動のプロセス

着点動作主動詞が表している動作には使役移動のプロセスが含まれている。着衣動詞の場合、動作主が手の操作により衣類に働きかけ、衣類を自分の身体に移動させ、動作の結果、衣類が動作主の身体に付着するということを表す。これらは動作主自身を着点とする使役移動として捉えることができる。

松本 (2017) は、移動表現を以下のように大きく 3 種類に分けている。

- (5) a. John walked into the room.
 b. John threw the ball into the room.
 c. John looked into the room.

(5a) は移動物が主語になる表現で、主体移動表現である。(5b) は目的語のボールの移動を表し、主語のジョンがその移動を引き起こしている。これは客体移動表現と言われている。(5c) のように、ジョンの目から出ているように感じられる放射物が移動していると考えられる表現は、抽象的放射移動表現と呼ばれている。

また、客体移動はさらに開始時起動型使役移動、随伴・運搬型使役移動、継続操作型使役移動と下位分類がなされている。

- (6) a. Andrew threw a ball into the net.
 b. Maria led the child to the school.
 c. Peter picked up a book from the floor.

(6a) は開始時起動型使役移動であり、使役行為が移動の開始時のみ行われ、使役者は移動物と一緒に移動しない。(6b) は随伴・運搬型使役移動となり、使役者が被使役者と共に移動し、使役行為を継続的に行う。最後の(6c) は継続操作型使役移動であり、使役者が継続的に使役行為を行うが、被使役者とは一緒に移動しない。

このような分類基準から、着点動作主動詞が表している動作を考察してみたい。まず、感覚動詞の場合は抽象的放射移動となり、それ以外は客体移動となる。具体的には、着衣動詞、負荷動詞、摂食動詞が表している動作は、使役者が継続的に使役行為を行うが、被使役者とは一緒に移動しないという点で継続操作型使役移動である。一方、「招く」「呼ぶ」「来す」などは領域外にいる人を自分の領域に入れる動作であり、使役行為は移動の開始時のみ行われ、使役者は移動物と一緒に移動しないという点で開始時起動型使役移動となる。

着衣動詞を使役移動動詞として捉える先行研究は、松本(2003)、當野・呂(2003)などがある。

松本(2003)は、「着る」などの動作主的動詞は、行為者が自らの上半身に衣類を移動させることによって自らの状態を変化させる行為を表すと

述べている。

また、當野・呂 (2003) は着衣動詞を取り上げ、着衣動詞は、“x causes y to move to z, where x = agent, y = clothes, z = body (part)”, つまり、<動作主 (= x) が衣服 (= y) を体 (あるいは体の一部分) (= z) に移動させる>という意味構造を成すと述べている。彼らはさらに、日本語、中国語、英語、スウェーデン語、マラーティー語の対照研究を行い、着衣行為は対象物である「衣服」を着点である「体 (の一部)」に移動させるという使役移動の表現であり、Talmy (1991) が提案する移動動詞における「動詞枠付け言語」と「付随要素枠付け言語」という枠組みが着脱動詞においても有効であると主張している。

知覚動詞及び知識の移動を含む「教わる」、中国語の“学”は抽象的放射移動 (虚構移動) を表す。視覚表現は虚構移動として議論されてきた (Talmy 1996, 2000, 松本 2004)。松本 (2004) では、移動表現で人間の視覚を表すという言語現象に注目し、「富士山 (の姿) が目に飛び込んできた / 入った」などを、視覚移動の一種である「映像の移動の表現」として取り上げ、これは「視覚対象から目の方向への移動に基づく表現」とであると指摘している。先行研究は、言語表現を研究対象に、主体移動としての視覚を扱っているが、本研究では、知覚行為に注目し、そこに虚構移動を引き起こす動作主の働きがあることから、使役虚構移動として扱う。

このように、着点動作主動詞が表している動作から、事物を動作主の領域に移動させるという一種の「使役移動の過程」と、移動物が動作主の領域にある (いる) という「使役移動の結果」という要素を抽出することができる。

2.2 動作主への求心性

着点動作主動詞に分類される動詞は単に使役移動を含むだけではなく、使役移動の着点が動作主になるという点も特徴的である。

通常他動詞文は、行為者はエネルギーの源であり、対象はその終点である (Lakoff 1977)。動作が動作主から出発し、被動作主において終結するのがその典型である。力の伝達としては動作主 → (道具) → 被動作主という流れである。(7) の文を Langacker (1990) の行為連鎖モデル (action-chain model) で表すと、その方向性は以下のように示すことができる。

(7) Floyd broke the window with the hammer.

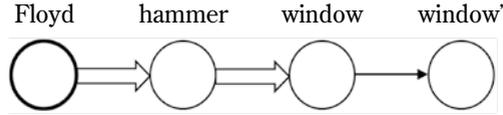


図 2. (7) の行為連鎖モデル

しかし、着点動作主動詞は他動詞でありながら、動作主から出た動作が対象物に及ぶものの、最終的には動作主のところに戻ってくる、という他動詞の典型から外れた意味の特徴を持つ。例えば、「食べる／吃」という動作は、動作主が（箸やフォークなどの食器を使って）食物に働きかけることによって食物が動作主に向かって移動し、その結果、対象物が動作主の身体部位である口（更に体内）に入る。この場合、図 3 が示されているように動作の着点は動作主自身になる。

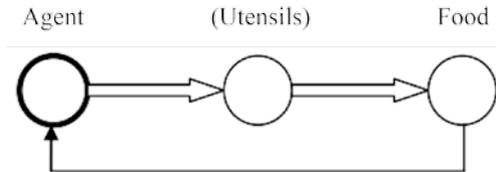


図 3. 飲食の行為連鎖モデル

このような EAT 系動詞について、堀江・パルデシ (2009) では描写される動作がそれを引き起こす仕手自身に向かうという意味で求心的 (centripetal) であると指摘されている。

2.3 動作主の受影性 (affected-agent)

動作主の受影性は「動作主への求心性」、つまり、動作主が動作の着点でもあるということと関連している。目的語の表している事物が動作主の身体または領域に入ってくるため、動作主が動作の影響を受けることになる。これは先行研究で affected agent と呼ばれている (Masica 1976, Saksena 1982, Haspelmath 1994, Kemmer 1993)。着衣動詞について、松本

(2000)において、「着る」などの動作動詞は、行為者が自らの上半身に衣類を移動させることによって自らの状態を変化させるという行為を表すとされている。つまり、着点動作主動詞は、動作主が動作を行う役割を担いながらも、動作の影響を受けているのである。

以上のように、着点動作主動詞は基本義において、「使役移動のプロセス」「動作主への求心性」「動作主の受影性」といった意味的性質を共通して持っていることが分かった。次節では、「再帰動詞」との相違について検討する。

3. 再帰動詞との相違

再帰動詞の定義は研究者によって差異が見られるが、本研究でいう着点動作主動詞とかなり近いものがあることから、ここでは着点動作主動詞と再帰動詞の相違を明らかにする。

Givón (1984) は Hopper and Thompson (1980) の研究を踏まえ、他動性の観点から、典型的な二項動詞が表している動作 (two-participant event) は、動作主である人間が意図的に無生物の被動者に動作を行い、被動者が直接かつ完全に動作の影響を受けるということであると述べている。

一方、二項動詞でも「再帰」という現象が含まれる。Faltz (1977) では、「典型的な再帰コンテキスト」を、2人の参加者のうち、1人は動作主 (Agent) または経験者 (Experiencer) であり、もう1人は被動作者 (Patient) であるが、動作主／経験者と被動作者は同じ実体であると述べている。「再帰」に関して Faltz (1977) と類似する見方を示しているものに高橋 (1975) の「再帰態」と工藤 (1995) の再帰動詞がある。

高橋 (1975) では、「羽を垂れる」「身をちぢめる」のような文は、自分の所属物に働きかける「再帰構文」とあり、以下のように述べている。

対格名詞と他動詞の関係を連語論的にみれば、ものに対するはたらきかけをあらわしているが、構文論のレベルでは、他に対するはたらきかけをあらわしているのではなく、主体である自分の状態をかえることを表している。つまり、対格名詞と動詞のくみあわさった連語が、ひとつかたまりになって自動詞相当となり、合成述語をなしている。

高橋（1975）は、「つける」や「着る」といった「何かを身につけることを表す」動詞にも触れているが、「再帰構文のほかに」というような表現を使用し、再帰構文と区別している。

工藤（1995）では、使役・他動・自動との関係性を考慮すると、再帰動詞は自動詞に近いと述べている。使役および他動は参加者が2つ以上の、主体から客体へと働きかける外的運動であるが、自動と再帰は、参加者が1つの、働きかけのない内部運動であると述べている。再帰と自動の違いは、「チューリップが芽を出す」と「チューリップの芽が出る」のように、所有者と所有物の内部分化がある場合に、所有者を主語とするか、所有物を主語とするかにあるとしている。

また、Kemmer（1993）は以下のようなスキーマで再帰と中間態（middle voice）を表している。図4の点線は、○で表している二人の参加者が同一であることを表し、図5は動作主から出た動作が動作主自身に向かうことを表している。

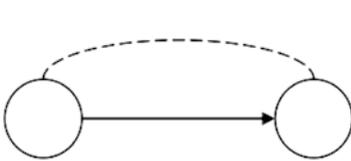


図 4. The direct reflexive event schema

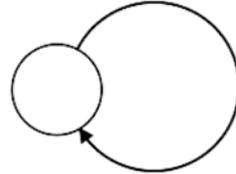


図 5. The body action middle event schema

(Kemmer 1993: 71)

Faltz（1977）や Kemmer（1993）、また工藤（1995）の考えをもとに着点動作主動詞と再帰動詞との区別を考えてみると、動作の着点が動作主自身であるという点において、両者は類似しているものの、顕著に異なる点も見受けられる。再帰動詞のほうは動作主と被動作主は同じ実体であり、動作主が自分の身体に働きかけ、動作が終結するという動作を表す。一方、着点動作主動詞は、動作主と被動作主は異なる参加者で、動作主が自分自身に働きかけるのではなく、自分以外の事物に働きかける。これにより、事物を自分の身体、または領域に移動させるという動作を表す。このように、高橋（1975）、Faltz（1977）、Kemmer（1993）や工藤（1995）などの定義でいくと、着点動作主動詞と再帰は違うカテゴリーになる。

一方、仁田 (1982)、村木 (1983)、Jacobsen (1989) など、「再帰」をより広くとらえる研究もある。

仁田 (1982) では、再帰とは、「働きかけが動作主に戻ってくることによって、その動作が終結を見るといった現象」であるとし、再帰的な用法しか持たない「着る」「はく」「脱ぐ」のような動詞を「再帰動詞」、普通の他動詞でありながら、その一用法として再帰的に使われる場合を「再帰用法」と呼んでいる。

一般的な他動詞は、「太郎は次郎を殴った」、「お菊は皿を割ってしまった」のように、動作主「太郎」や「お菊」とは異なる他の存在、すなわち「次郎」と「お皿」に対する働きかけを表す。これに対して、「着る」「はく」「脱ぐ」は他の存在に向かわず、動作性の働きかけが常に動作主自身に及ぶことによって動作が終結するとし、「再帰動詞」は「典型的な他動詞が有する<他者への働きかけ>といった意味的特徴を持たない。動作主から出た働きかけが動作主自身に戻って来ることによって、動作が終結を見るといった意味的あり方を取る動詞である」と定義している。

一方、「叩く、振る、かむ」などは普通の他動詞でありながら、(8)のように、その一用法として再帰的に使われる場合を「再帰用法」と呼んでいる。

- (8) a. 子供は手を叩いて喜んだ。
 b. 彼は、こちらを向いて、手を振っている。
 c. 慌ててご飯を食べたので、舌をかんでしまった。

(仁田 1982: 87)

仁田 (1982) における再帰動詞の定義は着点動作主動詞の定義とかなり類似している。ただ、仁田 (1982) は、再帰用法と再帰動詞をひとまとまりにして議論しているため、「着る」や「かぶる」も「典型的な他動詞が有する<他者への働きかけ>といった意味的特徴を持たない」、「動作主から出た働きかけが他の存在ではなく、全て動作主の体の一部に向かう」になる。「手を叩く」「舌をかむ」「足を折る」「腕を挙げる」などの再帰用法は確かにそうではあるが、「着る」「はく」などは、「お皿を割る」と同じように、「衣服」という事物への働きかけがある。また、仁田 (1982) においては、「脱ぐ」という動詞も再帰動詞に入れているが、「脱ぐ」の場合、動作主の働きによって、対象物が動作主から違っていくため、本研究の定

義だと着点動作主動詞に入らない。

さらに、村木（1983）では、以下の文を再帰的用法としている。

- (9) 山田は不思議そうに首をかしげている。
- (10) その女はいつまでも目をとじていた。
- (11) 窓からとびおりて、彼は足を折った。

(村木 1983: 10)

その他に、「汗をかく」「あくびをする」などの生理現象、「下痢をする」「けいれんをする」といった病理現象、そして、「帽子をかぶる」「上着をきる」などの衣服を身にまとう動作も広い意味での再帰的用法としている。これらの動詞は、すべて主体自身の動きを表していて、主体以外のものに働きかける動作ではないとされている。村木（1983）においては、「再帰」をより広くとらえている。ただ、村木も仁田（1982）と同じく、「主体以外のなものにかに働きかける動作ではない」として、これは衣服を身にまとう動作に相応しくないと考える。

中国語のほうは他動性の視点から再帰動詞を言及する研究は多くないが、従来の“及物动词”と“不及物动词”の分類に異議を呈し、両者にはっきりとした境界線がなく、“兼类动词”の存在を指摘する研究が見られる(李臨定 1991, 王俊毅 2001)。王俊毅（2001）においては、“兼类动词”のうち、“睁眼（目を開ける）”“张嘴（口を開ける）”“摇头（頭を横に振る）”“伸胳膊（腕を伸ばす）”などの表現は身体の一部に着目し、身体が Agent で、身体の一部が Patient であると述べられている。類似な研究は日下部（2008）においても見られる。

- A. 眨眼（睛）＜瞬きする＞, 点头＜頷く＞, 歪嘴（巴）＜口をゆがめる＞, 招手＜手を振る, 手招きする＞, 抱胳膊＜腕組みをする＞, 伸腿＜足を伸ばす＞
- B. 梳头发＜髪をすく＞, 洗手＜手を洗う＞, 刷牙＜歯を磨く＞
- C. 刮胡子＜髭を剃る＞, 剪指甲＜爪を切る＞, 拔牙＜歯を抜く＞, 切断手指＜指を切り落とす＞

(日下部 2008: 121)

「これらは全て、動作主が自分自身の身体部位に対して行う動作、所謂

いることがわかる。仁田 (1982) を除く Faltz (1977), 高橋 (1975), 村木 (1983), Jacobsen (1989), 工藤 (1995) 日下部 (2008) は、「足を折る」「身をちぢめる」「首をかしげる」などのような、対象が動作主の身体または身体の一部であるという動作のみ、もしくはそのような動作を中心に取り上げている。本研究では、再帰動詞と区別して着点動作主動詞という概念を用いる。そして、着点動作主動詞は、典型的な他動詞と典型的な再帰動詞の間に位置すると考える。

4. まとめ

本研究では、日本語と中国語において、他動詞でありながら、＜動作主が対象に働きかけることによって、動作主の身体または領域が着点となる事物の移動が起こり、動作主が動作の影響を受ける＞という意味を備えている動詞を着点動作主動詞と呼び、着点動作主に「使役移動のプロセス」「動作主への求心性」「動作主の受影性」といった意味的性質が共通して見られることを明らかにした。また、「再帰動詞」に関する先行研究を詳細に議論し、両者の異同を説明したうえで、着点動作主動詞は、典型的な他動詞と典型的な再帰動詞の間に位置すると結論付けた。

注釈

- 1 受容を表すのに「授かる」もあるが、「子宝を授かる」のように「授かる」が表す移動は主語の意図によらないという点で考察対象から排除した。
- 2 類似の分類は Backhouse (1981) にも見られる。Backhouse (1981) は、衣類とアクセサリーなどの非衣類と区別し、衣類動詞 (clothing verb) と非衣類動 (non-clothing verb) に分けている。そして、衣類動詞は身につける身体部位、また非衣類動詞は着衣の方法がそれぞれ問題になるとされる。

参考文献

- Backhouse, A. E (1981) Japanese verbs of dress. *Journal of Linguistics* 17: 17-29.
- Faltz, Leonard (1977) *Reflexivization: a study in universal syntax*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley. [Reprinted in 1985 by Garland Publishing.]
- Fillmore, Charles (1968) The Case for Case. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in Linguistic Theory*, 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Givón, Talmy (1984) *Syntax: A functional-typological introduction*, vol. 1. Amsterdam/

- Philadelphia: John Benjamins.
- Gruber, Jeffrey (1976) *Lexical Structures in Syntax and Semantics*. Amsterdam: North-Holland.
- Haspelmath, Martin (1994) Passive Participles across Languages. In: Barbara Fox and Paul J. Hopper (eds.) *Voice: Form and Function*, 151-177. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson (1980) Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 251-299.
- 堀江薫・プラシヤント・バルデシ (2009) 『言語のタイポロジー：認知類型論のアプローチ』東京：研究社。
- Jacobsen, Wesley M (1989) 「他動性とプロトタイプ論」久野暉・柴谷方良 (編) 『日本語の新展開』: 213-247. 東京：くろしお出版。
- Johnson, Mark (1987) *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.
- 影山太郎 (1980) 『日英比較 語彙の構造』東京：松柏社。
- 日下部直美 (2008) 「現代中国語における再帰表現に関する一考察—「V + 身体部位 N」の形式を中心に」『多元文化』第 8 号：121-133, 名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻。
- Kemmer, Suzanne (1993) *The middle voice*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』東京：ひつじ書房。
- Lakoff, George (1993) The metaphor system and its role in grammar. *CLS* 29: 217-241.
 ——— (1977) Linguistic gestalts. In *Papers from the Thirteenth Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, Samuel E. Fox, Woodford A. Beach, and Shulamith Philosoph (eds.), 236-287. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Langacker, Ronald W. (1990) *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 李臨定 (1990) 《現代汉语动词》北京：中国社会出版社。
- 陆俭明 (1991) 〈现代汉语不及物动词之管见〉《语法研究和探索 (五)》北京：语文出版社。
- Masica, Colin P. (1976) *Defining a linguistic area: South Asia*. Chicago: University of Chicago Press.
- 松本 曜 (2003) 『認知意味論』東京：大修館書店。
 ——— (2004) 「日本語の視覚表現における虚構移動」『日本語文法』4(1): 111-128.
 ——— (2017) 『移動表現の類型論』東京：くろしお出版。
- 村木新次郎 (1983) 「迂言的なうけみ表現」『国立国語研究所報告 74 研究報告集 4』国立国語研究所。
- Newman, John (1997) Eating and drinking as sources of metaphor in English. *Cuadernos de Filología Inglesa* 6(2): 213-231.
 ——— (2009) A cross-linguistic overview of 'eat' and 'drink'. In: John Newman (ed.) *The linguistics of eating and drinking*, 1-26. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.

- 仁田義雄 (1982) 「再帰動詞, 再帰用法— Lexico-Syntax の姿勢から—」『日本語教育』47: 79-80.
- Saksena, Anuradha (1982) *Topics in the analysis of causatives with an account of Hindi paradigms. (University of California Publications in Linguistics 98)*. Berkeley: University of California Press.
- 高橋太郎 (1975) 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103: 1-17.
- Talmy, Leonard (1991) Path to realization. In: *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 480-519. Berkeley Linguistics Society,
- (1996) Fictive motion in language and 'ception'. In: Paul Bloom, Mary A. Peterson, Lynn Nadel and Merrill F. Garrett (eds.) *Language and Space*, 211-276. Cambridge, MA: MIT Press.
- (2000) *Toward a Cognitive Semantics, Vol. I: Concept Structuring Systems*. Cambridge, MIT Press.
- 谷口一美 (2005) 『事態概念の記号化に関する認知言語学的研究』東京: ひつじ書房.
- 當野能之・呂仁梅 (2003) 「着脱動詞の対照研究—日本語・中国語・英語・スウェーデン語・マラーティー語の比較」『世界の日本語教育』13: 127-141.
- Williams, Joseph M. (1976) Synaesthetic adjectives: A possible law of semantic change, *Language* 52 (2): 461-478.
- 夏 海燕 (2010) 「「着点動作主動詞」から見る意味拡張の方向性」『日中言語研究と日本語教育』3: 56-66. 東京: 好文出版.
- (近刊) 『着点動作主動詞の意味の研究』(仮称) 東京: ひつじ書房.
- 王俊毅 (2001) 〈及物动词与不及物动词分类考察〉《语言教学与研究》第5期.
- 袁毓林 (1998) 《汉语动词的配价研究》江西教育出版社.